
仮面ライダー闘鬼一つよきな娘と未熟な鬼一

猫獅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー闘鬼―つよきな娘と未熟な鬼―

【Nコード】

N7256T

【作者名】

猫獅子

【あらすじ】

三人の鬼がオロチをしずめてから8年の年月が流れた―
そしてその三人のうちの一人、弦の戦士の弟子である若き鬼“闘鬼”と少し“つよき”な女の子たちが出会う時、新たな物語が幕を開ける―

いつもの仕事風景（前書き）

とりあえず書いてみたけど続くかは作者にも分からない

いつもの仕事風景

「せいちゃん、はよう来な置いてくでー!」

少し遠い場所から懐かしい声が聞こえてきた

「ちょっと待ってやゝ、――ちゃん速すぎて追いつかれへんわ…」

僕は息を切らしながらもその声を追いかけていく

せやけどあの子との距離は一向に縮まらず次第にあの子は僕の視界から消えてしもた

慌てて名前を呼びながら追いかけたけどあの子は最初からおらへんかったかのようにその場から姿を消しとった…

??? Side

「ほいさつと、おかえり」

戻ってきたディスクアニマルをキャッチして音弦で解析していく

「…、アカンまたハズレや

これで記念すべき20体目やなあ、って何の記念やねん」セルフツッコミというえらい寂しい真似をしながらケースにディスクアニマルを戻す

「なごみちゃん、海辺は全滅みたいやわ
あとどこが残ってる？」

僕はアウトドア用の椅子に腰掛けてさっきから黙ってタブレット型
PCを見つめている女の子に声をかけた

「あとは川岸に行ってるのが3体、山側が2体ですね
まあ今回は化け蟹が相手ですからあと3体と見ていいんじゃないで
すか」

タブレットPCから一度も目を離さずに答える無愛想ちゃん
君は新聞読んでるおとんか！

まあ答えてくれるだけでもだいぶマシになってるんやけどな
最初の頃なんてガン無視やったし

「さよか、そしたらその3体が帰ってくるまでなんかせえへんか？」
「じゃあ鬼のいないかくれんぼでもしててください」

「ネタが古いわ！いくら有名な作品やからってそんなネタ今の若い
子しらんやろ！っていうか僕鬼ですけど！」

十年以上前の某クレヨンな幼稚園児のネタを振られたんでとりあえ
ずツッコんどいた

「最後のツツコミが寒かったんでちょっと黙っててくれませんか？」

「ひどい！力作やったのにい！」

「それで力作ですか？」

それで芸人名乗るなんていい度胸してますね」

「僕いつの間にかエンターテイナーになってる?!
そないな自己紹介した覚えないで! まだ一話目なんやから読者勘違
いするやろ!」

「すいません間違えました」
なごみちゃんはさっきまでの無愛想な表情を消してすまなさそうな
顔を見せる

「い、いやええよ
こっちもいきなり怒鳴ってすまんかったな」

なごみちゃんがあまりにも素直に謝ったんでつい戸惑ってしもた
しかしあれくらい軽いボケに全力でツツコミを入れるとは我なが
らテンションが上がり過ぎやな
戦う前に疲れてまうわ
もうちょい落ちつか

「芸人じゃなくてゲイ人でしたよね」

「誰がゲイじゃあっ!!
ボケにもしていいボケと悪いボケがあるん知らんのか!」

なごみちゃんのデリカシーも何もない二段ボケのせいで落ち着くのは無理そうやった

「そんなに必死にならなくても……まさか凶星ですか?」
「いきなりゲイ扱いされたら普通キレるに決まってるやろ?!」

「全く、冗談が通じませんね」

このアマため息つきよった

「せやから冗談にならへん言うて…帰ってきたみたいやな」

僕が話を一旦止めて視線を上に向けると川を探索させていた紫色のディスクアニマル、ヤミカラスがこちらに飛んできた

「よっと、成果はあったかいな、と」

ヤミカラスをキャッチしてすぐに解析する

「……、当たりが来たみたいやで、なごみちゃん」

ディスクアニマルをケースに戻しながら告げた

「どうぞ」

声の方向に振り向くとなごみちゃんが僕の今の愛用の武器“烈斬”をこちらに差し出した

「あんがとさん」

僕は烈斬を受けとって担ぎ上げる

「行ってらっしゃい、ゲイ人さん」

「まだ言うんかい！」

僕の名前は坂上 清人や！」

「またの名をゲイ鬼」

「しっっこいんじゃあ!!」

「どんだけゲイで押してくんねん!」

あまりのしつこさにマジギレした僕は悪ないと思う

「はあ…ほな行ってくるで!」

僕は気を取り直して師匠譲りの親指を立てたチョキを前に突き出すポーズをとってから川の方へ走り出す

「いってらっしゃい、清人さん」

ちよつとひねくれた女の子のそんな声を聞きながら

いつもの仕事風景（後書き）

うちのなごみさんは原作よりはっちゃんけます

未完の鬼（前書き）

二話目投稿

オリジナルライダーだから設定とか書いたほうがいいんでしょうか？

未完の鬼

しばらく山を走ると川が見えてきた

「ヤミカラスが教えてくれたんはここらやな」

川に着くと辺りを見回しながら少し警戒を高めていく

「さあてどっから出てくるやろか」

辺りを注意深く見ていると…

ふと後ろから何か近づいてくる気配を感じて振り返ると人型の何か
が僕に向かって飛び蹴りを放とうとしていた

「うわっと?!」

めっちゃ際どかったがなんとか転がって避けて体制を整えつつ、烈
斬を構える

「姫かい?! ってことは…」

上空からの気配に反射的にもう一度横へ転がる
次の瞬間さっきまで僕がいた場所に勢いよく何かが落下してきた

「やっぱり童子もおるわな」「ふむ、鬼か」

「どうするの？」

あのコの餌?」

「鬼は意外とウマいらしいから我らで喰うのもアリだな」

童子からは女の声、姫からは男の声が聞こえてくる

「相変わらず違和感バリバリやな自分等、顔はええのに声のせいで絶対損しとるで？」

「鬼…食べるの？」

でもゴツゴツで不味そうだよ」

「確かにな

我にもとてもウマそうには見えん」

「じゃあ殺してポイでいいんじゃない？」

「……よし、それでいこう」

「待たんかいコラアッ！

魔化魍のクセにポイ捨てってどないやねん?! てか僕はゴミちゃうわぁっ！

それと最後考えるんめんどなっただやろ! 手抜きすんなや!

…僕は何でお前らにツツコミしとんねん?!」あまりの言われようについいつものようにツツコミを入れてしもたやないか

「なんか賑やかなやつだね」

「頭がかわいそうなんだろう？」

どうでもいいがな」

更に追い討ちをかけられた

「かわいそうちゃうしどうでもよく、ぐうっ?！」

再びツツコミを入れていると童子がこちらに飛び掛かってきよった烈斬を盾にしてなんとか受け止めるとそのまま童子と取っ組み合う形になる

「っ、人のツツコミは最後まで聞かんかい…」

「お前、なんかうるさいから死ね」

そう言うとき童子の全身を霧が覆いつくす
そしてその霧が晴れると童子の姿は人の形こそとっているものの、
全身が甲殻のようなものでできている異形の、まさに怪人と言える
姿になっていた

「怪人体になりよったか…」

僕も早いところ変身せなちよいますいな」

「鬼になる前にわたしが殺してあげるよ?」

そう言うとき童子は更に力をいれて僕を押し潰しに掛かってきた

「…………っ?!なんで潰せないの?」

童子は先ほどよりも力を入れているみたいやけど僕と組み合った体制はほとんど動いてへん

「なんや?ワレの力はこんなもんかい

ずいぶん非力君やお」

「くっ！押されてるっ？！」

僕は更に力を入れて烈斬で相手を押し飛ばそうとするが、それは真横からの急襲により阻止されてしまった

「ぎっ……ごぼっ！」

ま、また不意打ちかいな」「おい、いつまで遊んでいるつもりだ」

「うゝ、なんかあいつ変なんだよ」

どうやら怪人体の姫の攻撃で吹っ飛ばされたみたいやな

今回は避けることも防ぐこともできなかったから横っ腹に攻撃を受けて軽い呼吸困難に陥ってしもうたわ

「げほっ、すう…ふー」

向こうがごちゃごちゃ話しとる間に息を調えて自分の体を軽く動かして状態を確かめる

（内臓は血を吐いてへんからいける、骨は…2本くらい罅入っとるみたいやけど気合いでカバーするからいけるな、あと落ちた衝撃で全身痛いけど痛み感じるうちはまだいける、結果…）

「全っ然無問題や！さあ続きしよかあ！」

「む？まだ動けるのか？」

「まあね、それでも僕って結構丈夫やねんで？」

「ね？何か変だよね」

「そうだな…耐久力が人外じみている」

おかしいだの人外だのさっきから失礼なやつちゃ

「まあええわ

ぼちぼちこっちも本気でいかせてもらおか」

トウキは烈斬を地面に突き立てポケットからある物を取り出してそこらの岩の上に放り投げる
そして左腕に着けている変身音弦・音断のカバーを開き中の弦を掻き鳴らして額にかざす
すると音断の音波により額に鬼の紋章が浮かび上がる
「変身！」

トウキが叫びながら左腕を天に突き出すとサカキに雷が落ちて強烈な光りに包まれる

「ラァッ！」

トウキは上に挙げた腕をそのまま横に振って光を振り払った
光が消えるとそこには鉛のような鈍い銀色の体色に青銅のような汚れた青色の腕と縁取り、そして黒い装備帯を纏った一本角の鬼が立っていた

“ 闘鬼 ”

闘鬼は地面に刺さっている烈斬を片手で抜いて肩に担ぎ上げて敵に宣言する

「さっさとお前らとバケガニ倒してなごみちゃんの手料理食いに行かせてもらうで！」

（なんでだろう？

身に覚えのないことを勝手に宣言されてる気がする…）

別の場所では一人の少女が謎の苛立ちを感じていたとかいなかったとか

「ほな、こっちからいくで？」

僕は烈斬を順手で持ち体の横に構えて童子に向かって走りだす

「死にさせやあ！」

童子が射程内に入ると烈斬を振るって真っ二つに

「……あら？」

なっていないかった

「おっそ〜い、今の何？ コマ送り？」

うっさいわ！ てかなんで化け物がそんな用語しっとなねん…

「禁則事項だよ？」

「んな知識まであるんかい、どないなっとなのや」

考えたらこないによう喋る奴も今までにおらんかったな
まあええわ、考え事は後回しにしとこ

今は

「考え事とは余裕だな」

また不意打ちかましてきよったこいつらしばいたらなアカンからな
あ！

「芸がないんじゃないアホ！」

姫の攻撃を上体を反らしてかわしすれ違いざま烈斬で足を切断する
切り離された足はそのまま弾けて藻が辺りに飛び散っていく

「ふい〜とりあえず一体は無力化できたな」

あと一体とでかいの一体か…
いや場合によっちゃ傀儡もおるんか？

なるべく少ない方がええなあ……頼むから空気読んでや

「おー凄い凄い

けどこれはどうか、な！」

そう言うや童子は口元から濁った水をこっちに飛ばしてきた

「ほいさつと」

飛んで来た水を横に転がることで避けると水のかかった岩が強烈な酸のせいでドロドロに溶けていった

相変わらず恐いわー、あの液体

当たると変身してる状態でもなかなか痛いし

「むー、当たれよー！」

童子はそんな子供みたいなことを言いながら再び水を放ってくる
しかも複数…

「うお?! どわぁ！」

まあええわ、考え事は後回しにしとこ

今は

「考え事とは余裕だな」

また不意打ちかましてきよったこいつらしばいたらなアカンからな
あ！

「芸がないんじゃないアホ！」

姫の攻撃を上体を反らしてかわしすれ違いざま烈斬で足を切断する
切り離された足はそのまま弾けて藻が辺りに飛び散っていく

「ふいゝとりあえず一体は無力化できたな」

あと一体とでかいの一体か…

いや場合によっちゃ傀儡もおるんか？

なるべく少ない方がええなあ…：頼むから空気読んでや

「おー凄い凄い

けどこれはどうか、な！」

そう言うや童子は口元から濁った水をこっちに飛ばしてきた

「ほいさっと」

飛んで来た水を横に転がることで避けると水のかかった岩が強烈な
酸のせいでドロドロに溶けていった

相変わらず恐いわー、あの液体

当たると変身してる状態でもなかなか痛いし

「むゝ、当たれよー！」

童子はそんな子供みたいなことを言いながら再び水を放ってくる
しかも複数…

「うお?! どわぁ! つくそが！」

連続で飛んでくる水を転がったり烈斬で防ぎながら転がったりしな

がら躲していく

転がりすぎ？じゃかあしい！あれ体中に受けてみ？スライムみたいになれるから
ていうか

「ええ加減しつこいわ！」

転がった際に石を数個拾いこっちに飛んでくる水に向けて投げつける
石は全て水に当たったが水に触れると溶けてしまった
だが水は石にぶつかったことで勢いをなくし、こっちに届く前に地面へと落ちていった

「つしゃ、チャンス！」

僕は先ほどより大きい拳くらいの大きさの石を拾い上げ自分の前に
落ちるように上にほうり投げる

そして烈斬を両手で長めに持ち野球のバッターの構えをとって絶好
の位置に落ちてきた石を割れへんように力を押さえて打つ叩く

「しっかりキャッチせえよ？」

ガキンッ！というちよつと烈斬のボディが心配になるような音と共に
石はかなりのスピードで目標へと直進し童子の顔面を捉えた

「づあっ?!」

水を飛ばすのに集中しとったんか分かんが童子は石を避けもせず
顔面に喰らって上半身を仰け反らせた

「もいっちょおまけにコイツもくれたる！」

烈斬を片手に持ち直して再び童子に向けてオーバースローで力いっぱい投擲した

先ほどの石とは比べものにならない程に勢いがついた烈斬を未だにふらついている童子が避けられるはずもなく烈斬がその身体を貫いてそのまま森の中へと飛んでいった

「……………やば、力加減めっちゃミスった」

あれ…どないしょ？

童子は終わったけど一応まだ姫生きとるしでかいのが残ってるんやけど…

「……………ま、ええか」

取りに行ったら時間かかるし、姫らも逃げるかもしれんしな

にしても今回も全部烈斬でいけるかと思っただんやけどなあ

相手がよう喋るからつい油断してもうたんやろか？

こりゃあとで反省やなあ

とりあえず今は、

「姫…まだおるか？」

姫の足を切り落とした場所に向かい放置されていた姫に近づく

「お、おったおった

…何故に人間態？」

視線の先には膝から先がない何故か人間態の姫が仰向けに倒れていた

「こちらのほうが楽だからな
それにお前も美女と話せて嬉しいだろう？」

「そのオッサンみたいな声と服のセンスなんとかしてくれたら美女
って認めたるよ」

「悪いが生まれつきだ」

「そら災難やったのお」

「我は結構気に入ってるんだが…」

おお…なんか落ち込んだる

「あれ？よく聞いたらかなりダンディな声やん
それにその服もええ生地使ってるんちゃうの？肌触りゴワゴワしと
るけど」

「そ、そうか？」

実は服はこの前新調したばかりなんだ」

すまん、分からん

「……………ところで貴様は何故我の胸に足を乗せている？」

「そりゃ触らんとお前の服の手触り、もとい足触りが分からんやん
け」

何言っとなねんこのオッサン女

「ならばもうその足を退けてもいいのではないか？」

「僕も退けたいんやけどお前の胸が僕の足揉んどるから離れたあても離れられへんわ、ほれ」

足を軽く動かしてみる

「っん…ふあん！」

「オッサンの声で喘ぐなボケ！」

「だったら揉むなボケ！」

「揉んどれへんわ、揉まれとんねん！そこ絶対間違うなや！」

「黙らんか！セクハラ野郎めが！！！」

セクハラ…セクハラ野郎言われた、お兄さんショックやわ

もみもみ

「くやしいっ…けど感じちゃう！」

「せやからキモいんじゃない！このどアホ！！」

でもセリフの使い方としては100点満点やわ…」

「というより我等は何故このようなくだらぬことを言い合っておるのだ？」

「そりゃお前：作者がギャグ成分をちよつとでも補給してきたかったからやろ？」

「また訳の分からんことを…」

で、そのギャグ成分とやらはまだいるのか？」

「いや、もういらん」

というよりこちら辺が作者の限界や

「ならば早く殺せ

少々疲れた」

姫は本当に疲れとるのか目を閉じたまま開こうとせえへん

「まあ待ちや

まだシリアスパートが残つとんねん」

「……今度は…、何だ…？」

目を閉じたままゆっくりとした口調で訊ねてくる

「お前らに鬼が美味いって吹き込んだ奴は誰や？」

ついでにコマ送りやら禁則事項って言葉はなんでしつとった？」

今までのチャラけた態度を少し真面目なものへ切り替えて問いただす

「片割れが言わなかったか？」

禁則…事項とな…」

姫が苦しそうにその言葉を言い終えると僕は姫の上に乘せとった足に体重をかけていく

「そか、ほなもうワレには用なしやならんじゃさよなら」

そう言っで一氣に力を込めて姫の身体を踏み抜く

「っ……………うあ……………」

呻き声をあげた姫はそのまま身体を藻へと変えた

「……………はあ、何も聞けんかったな」

ため息を吐いてその場に座りこむ

「けど今回の童子らがなんやおかしかったんは一応おやつさん達に報告しとこか」

あー早く帰ってなごみちゃんのご飯食いたい
なんだかんだ言いつつ作ってくれるからなあ、ホンマツンデレちゃんや

よし！じゃあ烈斬拾ってキャンプに行k【ザッパアアアン！！】…
あ、化け蟹忘れとった

「面倒くさいけどやったるか……………って烈斬ないやん」
あのすぐ取って来るんで少し待ってt【ブオオオオン！】ですよねー
振り下ろされた鋏を避けて相手を見据える

「しゃあないな、今回はこいつで相手したるよ

最近滅多に使ってへんのやからありがたく思えや」

そう言って僕はベルトの後ろに付いている物を外す

「んじゃさっさと自然に帰れや、この蟹ミソヤロー！」

「終わった終わったーっと」

化け蟹？ あんな僕が本気出したら5分からんよ

とりあえず頭の変身だけ解いて……アカン、また失敗した
頭だけのつもりが全身解除してもうたわ

つまり裸男、ストリーキング、露出狂など様々な呼び方があるが一番分かりやすくシンプルな呼び名はこれやろう……変態「誰が変態か！！」って一人でノリツツコミやったらちよっと死にたくなっただけ」

けど大自然の中で真っ裸って開放感溢れて気持ちええんよな、何かに目覚めそうにもなり……ナリマセンヨ、ヤダナーシユジンコウガヘンタイナワケナイヤン、アハハー

「アレは何処やろ？ ここら辺に放ったはずなんやけど」

アレっていうのはへんしする前にポケットから出してた物のことな

アレがないとなごみちゃんがディスクアニマル投げつけてくんねん

「お、良かった少し濡れとるけど無事や」

落ちていた物を拾って足を通し、腰まで上げる

「よし！パンツも履いたし今日はなごみちゃんにディスクアニマル投げつけられんで済むわ

」

そうパンツです

どこぞの旅人なライダーと同じくパンツは必需品です
だつてないとディスクアニマル投げつけられるわ一般人に見つかつて通報されるわで大変なんやもん（泣

やったら首だけ変身解いたらええのに？出来るんやったらとつくにやつてるよ！けど出来へんねん！てかどうやんねん？！全っ然感覚掴めへんねんけど……ん？なんやヤミカラスちゃん？

ああ烈斬探してくれたんやね、ありがとう「ねえおかあさん、あの人パンツ一丁でギター持って何してるの？」

「しっ！あんな変態見ちゃいけません！」

「おい、その君！そんな格好で何してるんだ？！」

「とりあえず通報しとこうか」

「ウホ、イイ身体！」

うん現状確認しよか

ここどこ？

周りを緑に囲まれた川辺

あれ誰？

恐らくバーベキュー的なのをしにきた家族

あの人たちが見てるのは？

パンツ一丁でギター持ってCDと話してる僕

結果…どう見ても僕変態です、ありがとうございます
ただ最後の奴はどう考えてもソッチのケがある人です、ありがとうございます
ござ…いません！ってこんなこと言っとなる場合やない！
はよ逃げなヤバイ（二つの意味で）
ダアアツシュウ！

「アアン待ってええん！」

いーやーやーやー！
明日からいつもより真剣に変身解除の修行をすることを心に決めました、まる

帰路につく若人（前書き）

この小説は行き当たりばったりを主成分にしています

帰路につく若人

「たっだいまー！」

変態っちゅう罵り声を浴びながら逃走してなんとかキャンプまで戻ってこれた

なごみちゃんが見えたんで手を振るとなごみちゃんも手を挙げて応えてくれた……ん？

「なごみちゃん、なんでディスクアニマル3枚も持つとるん？」

なごみちゃんは答えずとただニヤリと嘲笑ってディスクアニマルを惚れ惚れする投球フォームでこちらに纏めて投げてきた

「へ?! ちょっと、なんで！」

ガンッ！

ドスッ！

メキヨッ!!!!

「」

ああこりゃヤバイ、どれくらいヤバいかっちゅうと息子の闘鬼Jr.に直撃したのに全然痛ない、むしろ感覚がない、玉が一つなくなっ
とつても何も驚かん

ていうか人中、鳩尾、金的同時攻撃はアカンよ、普通に死ぬって、鍛えようもないもん、Jr.は鍛えてもベッドの上以外では弱い子なんよ

「どうしたんですか清人さん？
顔が悪いですよ」

「（色つけんかい…）」

声を出そうとすると振動でJr.に永久にストライキされそうやら口パクで突っ込んだ

「（何でまた投げられたん？ちゃんと服着とるやん）」

「すいません、なんか恍惚とした顔がムカついたんで」

なんやねんその理由、しかも恍惚とした顔で…まるで僕が裸を公衆に晒して悦ぶ変態みたいやないか

僕は露出狂になった覚えはないで？

「とりあえずお疲れさまでした
今日は結構早かったですね？」

「あ、あー良かった、声出るわ

いやー今日は途中までしか烈斬使わなかったからな」

「ああ久しぶりにあっち使ったんですか」

「ちよつとミスってもうてな…」

まだまだ修行不足や」

「頭だけ変身解除出来ない時点で明らかに修行不足だと思いますけど」

「ハハ、…面目ないわ」

なごみちゃんの指摘に苦笑いしながら立ち上がる
ちよい内股やけど気にすんな

「ほな僕着替えてくるから先に片付け始めといて、着替えたら手伝うわ

……覗いたらアカン、すいませんでした！」

再びディスクアニマルを構えて思わず標準語で謝ってしまうほど威圧感を出しているなごみちゃんから離れて着替えを取りに行った

テントを片付け終え僕は師匠の愛車の三代目雷神（ちなみに初代は魔化魍に潰され二代目は僕が破壊した）で山を下って松笠の椰子家へ向かっていた

「最近天王山さんとはどうや？
仲良うしとるんか？」

「……それなりには
ちなみに名前間違えてますよ」

「そか、頑張っとるみたいやな
偉いでなごみちゃん」

運転中やから視線は向けることはできんだけどなんとなくなごみちゃんが微笑んだ気がした…

「なにニヤけてるんですか？
気持ち悪いんで降りてもらえませんか」

と思ったけど気のせいやな！
このアマが笑うとしたら嘲笑だけや
微笑み？そんな儚げな笑い方するわけな>ブスッ！<ギイヤアアア
ア！…！なにしてんのこの子？！運転してる人の足にボールペン突

き刺すとかアホか！下手したらお前も死ぬんやぞ？！
っーか、ついアクセル全開で赤信号振り切ってもうたやないか！

「安全運転でお願いしますよ」

「やったら車内の安全を保障してや……」

うう、腿が痛いわ

そうや、こいつ山の中に置いてきたら……後日100倍にして復讐
されるな、うん

なんてことを考えていると上着のポケットから『だらしのないねえ、
このゴミがっ！』という罵り声が聞こえてきた

「ん？なごみちゃん、僕の携帯に電話かかってるみたいなんやけど
代わりに出てくれへんかな
多分みどり先生かたちばなからやと思うから」

みどり先生とは新しい武器のことを研究する約束しとったし、たち
ばなには今回の仕事の報告せなアカンから電話やったらどっちかやろ

「…相変わらず正気を疑うような着信音ですね」

「ホンマはめっちゃ羨ましいんやろ？」

「黙れよゴミ屑」

「（ゾクッ）………そんなことより、ええからはよ取ってよ」

なごみちゃんは無言で差し出された携帯を取って電話に出る
侮蔑の視線が気になるけどまあええわ

「もしもし椰子です」

今清人さんは行きつけのSMクラブに行ってて電話に出られません」

「ちょい待てや！」

僕そんなところ……行ったことないよ？」

知り合いに連れられて行ったところはちょっと変わってたけどただの喫茶店やったしな、うん行ったことない………はず

「……どうも、お久しぶりです……ええ……はい分かりました」

無視られとる？！

フっというてそれはないで……

「清人さんに直接話したいらしいですよ」

「直接？ってことはみどり先生から電話か」

報告やったらなごみちゃんにも出来るしな

僕は車を道路の脇に停めてなごみちゃんから電話を受け取った

「あ、みどり先生ですか？」

この前言うてた話なんですけどね、」

『いやみどりさんじゃないんだけど……』

「え？」

ちやうの？ていうか今の声って……

『えっと安達だけど……久しぶりだね、トウキ君』

「お、おおお久しぶりぶりです、明日夢先生」

『ぶりぶりって……』

あ、アカン舌が回らへん……

とりあえず落ち着いて、落ち着いて………よしっ

「こ、今日はお日柄もよく足元の悪い中お越しくださり『結婚式？！』っていうか天候おかしくない？

とりあえず一回落ち着いて、ね？』す、すいませんっ」

『それで用件なだけどさ………なんで病院こないの？』

「えゝいや、それは」

『予定では一昨日来るはずだったよね？

だから気になってさ』

「せやから、それは…」

『それは？』

「めんどくさあて（キラ☆シ」

『………』

「あのお明日夢先生？」

ヤバイ、また怒らしてしもたか？

『はあ、次いつ来れるの？』

「あれ？明日夢先生怒ってないんですか？」

前にドタキャンした時は2時間以上説教されたのに

『思うところはあるけど初めてって訳じゃないし、君がうちの病院を嫌がる理由も知ってるからね』

「…すいません」

『大丈夫だよ

で、次の休み辺り来れないかな？』

かなわんなあ、この先生には

「……分かりました

明後日一応休みなんでそっち寄らせてもらいます」

『ありがとう』

じゃあしつかり【用意】して待ってるよ』

携帯をポケットにしまい込んでハンドルを握る

「なごみちゃん、家まで送るわ」

「いいですよ、清人さんの家と反対方向じゃないですか」

「ちょっと今日のうちに花でも選んどこう思ってたな」

「…今どきプレゼントに花を贈られて喜ぶ女の人って希少ですよ?」

「花屋がそれ言うたらアカンやろ!! てかプレゼントちゃうよ」

「デート(妄) じゃないんですか?」

なんや(妄) って?! 妄想か? 妄想なんか!
んな悲しいことせんわ!

「ちやうよ、ちょっとした……お見舞いや」

「? そうですか」

じゃあ家までお願いします」

「あいさー」

そしてなごみちゃんを椰子家まで送り届けた僕はのどかさんに花を
取り置きしてもらい帰宅した

病院か、半年ぶりくらいやな

何回も行ってるけどあそこには近寄りがたいわ

……あまたボイコットしたなってきた

けど明日夢先生に迷惑掛けすぎるんも悪いし腹括るか…

けどやっぱりボイコ(r y

帰路につく若人（後書き）

終わり方が分からない！

簡単な設定（前書き）

設定だけ決めてみました
また変更するかもしれません

簡単な設定

名前ー坂上 清人 サカガミ セイト

コードネームー闘鬼 トウキ

武器ー音撃真弦 烈斬、????

年齢ー20

身長ー170センチ

見た目ー髪は白に近い金髪（染めた）でクセ毛、顔は童顔、オーズの
のカザリ（もちろん人間態）がモデル

性格ー常にチャラけているが特定の話題が出ると真面目になる
機械をいじり始めると軽くマッドが入るが技術は天才的で小暮やみ
どりが認めるほど。ちなみにこの三人が揃うと全員マッドになって
とんでもない物が出来上がる（例としては独自の方法で鳴刀 音叉
剣を復活させた）

本人は自覚していないが生粋のマゾで露出狂のどうしようもない変
態（猛士の知り合いは既に諦めている）

趣味ー機械いじり

大切なものートドロキに借金してまで作り上げた愛車＞雷雲＜

経歴ーオロチを静めた後に関西圏で事件が起こり、その時派遣され
ていたトドロキに助けられたのを機に家族との縁を切って猛士に入
り、トドロキの弟子となる

トドロキが関東へ戻る時に一緒についてきて一人暮らしを始めた（それまではトドロキの家で居候）

中学もほとんど通わずに修行に明け暮れていたが見兼ねたトドロキやみどりに勉強を見てもらったおかげで高卒以上には学力がある（数学と科学は全国クラス）

5年の修行を経て正式に鬼になった

鬼になってからはみどりと共同で作った武器を使っていたがなごみが魔化魍と関わった際壊れてしまう

それを知ったトドロキが自身が保管していたザンキの形見である烈斬を継がせることにした

関東一の弦使いのトドロキに教えを請うていたにもかかわらず一向に上達しなかったため、なかば修得を諦めていたがこれを機に一から実戦で鍛え直している

そして松笠近辺で魔化魍の出現が増えている原因を調査するため竜鳴館の橘平蔵に協力を求めに行ったところ何故か3年の生徒として通うハメになった

現時点での交友関係

- ・トドロキー鬼の師匠
- ・椰子なごみードSサポーター兼ほっとけない後輩
- ・滝澤みどり、小暮耕之助ーマッドな仲間
- ・キョウキ（桐矢京介）ー先輩兼兄貴分
- ・安達明日夢ー猛士の医療班兼主治医
- ・ヒビキーなんかスゴい人
- ・イブキーバイク仲間
- ・天美あきらー猛士の事務局長見習い兼松笠の喫茶店＜あまみやくのマスター
- ・霧夜エリカー猛士スポンサー、キリヤカンパニーのご令嬢兼ハンター（ストーカー的な意味で）
- ・佐藤よしみー苦勞人兼ハンター（ストーカー的な意味で）

- ・戸田山日菜佳一相談者兼一児の母
- ・和泉香須実一玉の輿兼二児の母
- ・大江山祈一????

仮面ライダー闘鬼

外見は轟鬼や斬鬼の色違い（体色は鉛色、腕と縁取りは青銅色）
専用の変身鬼弦＞音断＜で変身する

能力的にはパワーだけならアームド響鬼を上回るが技術や経験が足りない
ので持て余し気味

戦闘スタイルは烈斬での戦闘や鬼闘術・雷撃拳などを使つての我流
ボクシング、他

早がけー100Mを5秒

跳躍力ー70M

打撃力ー60T

蹴力ー70T

必殺技「音撃斬・雷電斬震」「?」「?」「?」

三代目雷神

トドロキが魔化魍退治に使っているワゴン車

ホンダ・エレメンスがベースだったが三代にわたりマッドに修復&
amp;改造されてすでにワゴン車というところしか共通点がない
スピードがおかしい、小回りの効き方がやばい、車内が豪華すぎ、
燃費が地球に優しすぎるという間違つても通常の車検には出せない
一品

色は緑と変更されていないが各所に銀色のラインが入っている

雷雲

トウキが給料ほとんど使っても借金しなければ予算が足りなかった
チートマシン

ヤマハ・V-MAXがベースでマッド改造によりV-MAXのピー
キーさを更に底上げしている

色は紺色を基調に白のアクセントというカラーリング

今のところこれを楽しめるのはトウキとイブキのバイク馬鹿の
み（常人が乗ると加速でぶっ飛ばされる）

更に精錬された鬼石が組み込まれており、鬼に変身した状態で乗る
と倍以上の性能になり色が黒を基調に群青色のアクセントへと変わる

最高時速…300km

変身時最高時速…640km

怯える心

ついに病院に行く日、僕は花を取りにYASHIを訪れた

「いらっしやいませ」

あらゝ坂上さんこんにちわ」

「こんちわ、のどかさん予約しとった花ありますか？」

「用意してますよ」

ちよっと待っててくださいねえ」

そう言っのどかさんは店の奥に引っ込んで行った
そして待つこと数分、のどかさんは花束をかかえてこちらにやって
来た

「おまたせしました」

花はこんな感じで大丈夫かしら？」

「いけますよ、ええ感じです」

「そう？よかったわ」

ところでこれから誰かのお見舞いに行くんですか？」

「そうですけど、ようわかりましたね」

なごみちゃんから聞いたんかな

「そのネリネの花言葉からなんとなくかしら？」

花言葉：【また会う日まで】か

「正解ですよ

ちよっと知り合いが事故ってもうて」

「そう：早くよくなるといいわね」

「ええ、ホンマに：」

ちよつと雰囲気が暗くなつてしもたな

空気切り換えな

僕は努めて明るい声を出した

「そしたらこれなんぼですか？」

「お金は結構ですよ」

だっていつもなごみちゃんがお世話になつてるんですもの」

「それはあきませんよ！

いつもなごみちゃんをあんな危険な場所に連れていつとるのに：ホンマやったらのどかさんにドツキ回されてもおかしいのに」

「それは違うわ」

そう言ったのどかさんはいつもより真剣な顔をしていた

「なごみちゃんは坂上さんや猛士の人たちに関わってから変わりつつあるわ

私に料理人になりたいって本当の夢を教えてくれた、坂上さんの仕事を手伝いたってわがままだっていつてくれるようになったそれに最近はたまにだけど本能寺さんともしゃべってくれるようになったのよ」

のどかさん：……なんか名前違う人いませんかでした？

「なごみちゃんは多分良い方向に変わってるんだと思うの

前のなごみちゃんは死んだお父さんのことを必要以上に背負ってたんじゃないかしら：

それだけお父さんが大好きだったんだとおもうけれどお父さんだっ

てなごみちゃんのことを縛りつけたくはないと思うのよ
だからなごみちゃんが背負っている物をもう少し軽くしてあげたい
の」

のどかさんはまっすぐに僕を見ていた

「だから坂上さん、なごみちゃんをもう暫くそばに置いてあげてくれませんか
お願いします」

頭を下げたのどかさんを見て僕は非常に慌てた

「ちょ?! 頭上げてくださいって!
わかりました、わかりましたから」

「そう、よかったわ」

顔を上げたのどかさんはいつも通りのほんわかスマイルを浮かべていた

「預かるからにはなごみちゃんは絶対に守ってみせますよ」

「はい、お願いね」

「んじゃとりあえず花代を…」

「だから…」

結局のどかさんの押しに負けてネリネの花束頂いてもた
こりゃ借り一つやな：

とりあえず受け付け済ますか

「すみません

この時間に予約してた坂上やけど…」

「あ、久しぶりだね、坂上くん」

ん？病院なんか滅多にけえへんから知り合いは明日夢先生くらいし
かおれへんはずなんやけどな：

「え？持田さん？

何でナース服着て受け付けおるん？」

「エヘヘ、実は今年からこっちの病院に移らせて貰ったんだ」

「ヘーそうなんですか」

「ちょっとーなんかリアクション薄くない？」

「いや僕病院とか滅多に来んからあんま関係あらへんし

それに移動した理由って明日夢先生でしょ？」

あ、顔反らした

この人の明日夢先生好きも凄いな

聞いた話じゃ明日夢先生が医者になるって聞いて看護師目指したら
しいし

「で、明日夢先生は持田さんがこっち来た時何て言うたんですか？」

「おー偶然じゃん……………」

流石明日夢先生鈍すぎや

「…あー、とりあえず明日夢先生んところ行って大丈夫ですか？」

「え？あ、うん大丈夫だよ」

おお瞬時に笑顔作ったな

半ばノリで始めたにせよなかなか向いとるんちゃうかな

「そんじゃ行ってきますわ

持田さんも朴念仁の攻略頑張ってくださいね」

「うん、」結局のどかさんの押しに負けてネリネの花束頂いてもた
こりゃ借り一つやな…

とりあえず受け付け済ますか

「すみません

この時間に予約してた坂上やけど…」

「あ、久しぶりだね、坂上くん」

ん？病院なんか滅多にけえへんから知り合いは明日夢先生くらいし
かおれへんはずなんやけどな…

「え？持田さん？

何でナース服着て受け付けおるん？」

「エヘヘ、実は今年からこっちの病院に移らせて貰ったんだ」

「ヘーそうなんですか」

「ちょっとーなんかリアクション薄くない？」

「いや僕病院とか滅多に来んからあんま関係あらへんし

それに移動した理由って明日夢先生でしょ？」

あ、顔反らした

この人の明日夢先生好きも凄いな

聞いた話じゃ明日夢先生が医者になるって聞いて看護師目指したら
しいし

「で、明日夢先生は持田さんがこっち来た時何て言うたんですか？」
「おー偶然じゃん……………」

流石明日夢先生鈍すぎや

「…あー、とりあえず明日夢先生んところ行って大丈夫ですか？」
「え？あ、うん大丈夫だよ」

おお瞬時に笑顔作ったな
半ばノリで始めたにせよなかなか向いとるんちゃうかな

「そんじゃ行ってきますわ
持田さんも朴念仁の攻略頑張ってくださいね」

「うん
そういえば安達くん今日なんかスゴイ物用意してるっていったよ」

……帰ろかな
どうせ無理やろうけどさ

明日夢先生のいる部屋の前に来たのでドアをノックした

「すみません
坂上ですけど今大丈夫ですか」
「うん、入っていいよ」

許可が出たので部屋に入らせてもらった

部屋はドラマなんかでレントゲン貼って病気の説明をするような部屋だった

なんつーか余命宣告されそうで嫌やな…

「久しぶり、元気だった？」

「もちろん！この半年ケガ一つなく過ごしてましたよ」

ホンマは一昨日骨に罅入ったばっかやけどな

「うん全く信用できないから後でじっくり調べるね」

あはは、いつも通り僕されてへんなー

アカン目から目やにが…

「ちゃんと顔洗ったこうね」

「あい」

軽い会話をしつつ明日夢先生がいつの間にか出してくれたコーヒーを頂く

「とりあえず変わりなさそうで安心したよ」

「まあ僕からこの軽さ抜いたら何も残りませんからね」

「そんなことないって………ただの変態になっちゃうよ（ボソ）」

「ん？何て言うたんですか？」

「何でもないよ」

それより僕もこの後ちょっと忙しくなるから早速診察始めようか」

なんか誤魔化されたような気もするけどまあええか

「あい

そいや持田さんってここで看護師やってたんですね」

「ああ、今年からうちの病院に来たんだよ

前にいたところのほうが設備や待遇なんかは良かったはずなんだけど」

流石朴念仁、全く気づいてへんわ
ここは僕が援護射撃したるか

「こっちに目当ての男でもいたんとちゃいますか？」

「っ？！そそそ、それはないんじゃないかなあ
だってほら……ねえ？！」

「いやいや医者って女の子に人気ですよ
特に若くて腕のいい人なんか持田さんのタイプっぽいんですよ」

「いや、でも……そんな、まさかあいつか
それともあの人なのか」

うん、これ無理
っていうか鈍すぎや

自分も気があるのに相手からの好意に気づいてへんとか神がかった
鈍さやな

とりあえず言えるんは……持田さんドロップ
アウトも選択の一つかもしれへんで！

「明日夢先生、さっきの嘘や、はよ検査済ませましょ」
「え？嘘？どこから？」

慌てる明日夢先生を尻目に検査を行う部屋へと歩いて言った

検査もだいたい終わってあとは……胃カメラかいな

「ケツにも入れられるんは何回やっても嫌やなあ

明日夢先生さっさと終わらせてくださいよ?」

「ダメだよしっかり調べとかないと

何か見落としてたら大変なんだよ?」

「わかりましたって

……明日夢先生その手に持ってるんは何?」

「え? 胃カメラだけど?」

「イヤイヤイヤ! 太いやん! いつもよりだいぶ太いやん!

子どもの腕くらいありますやん?!」

「そうかな? 見間違いだと思うよ」

え? 明日夢先生めっちゃいい笑顔なんやけど?

怖い怖い恐いて!

「あ、明日夢先生なんか怒ってはります?」

「あはっ、やだなあ

怒ってなんかないよ……たかが半年ドタキャンされたくらいで」

バリバリ怒ってますやん か

てか持田さんが言うてたんこれかー!

「いやちょっと待って下さいってそんなん入れられたらケツ死にますってマジでああそんな笑顔で近寄ってこんといてあ、

アーーーーー!!!」

もう括約筋が絞まれへんわ……

「それで検査結果なんだけどね…」

目の前には普通の笑顔を浮かべている隠れサドな先「次は口から突っ込むよ？」…………ナチュラルに心読むのとそのいい笑顔やめてください

「はあ、怒りたくもなるよ、こんな結果を見たら…

トウキくんこの半年でどれだけけがしたのさ？」

「えーと…………骨折が六回、罅は一昨日のを入れて三十回くらい、内臓にダメージ負ったのが「カルテ見れば分かるからもういいよ」数えて損したやないですか」

「僕が言いたいのはなんでケガしたその日に病院に来ないのかな？
ってことなんだけど？」

「だって骨折しても固定して寝とけば何日かで治つとるし、ケガもなごみちゃんの飯食って寝とけば酷いん以外は治つとるし」

「じゃあ酷いのは？」

「気合い入れて我慢」

「たまに君が医者にケンカ売ってるんじゃないかと錯覚するんだけど…」

「つつても明日夢先生も僕がこんな身体になった理由知つとるでしょ？」

「だから怒るに怒れないんだけどね」

「まあこれからは月に一回は」もう括約筋が絞まれへんわ……

「それで検査結果なんだけどね…」

目の前には普通の笑顔を浮かべている隠れサドな先「次は口から突っ込むよ？」…………ナチュラルに心読むのとそのいい笑顔やめてください

「はあ、怒りたくもなるよ、こんな結果を見たら…トウキくんこの半年でどれだけがしたのさ？」

「えーと…………骨折が六回、罎は一昨日のを入れて三十回くらい、内臓にダメージ負ったのが「カルテ見れば分かるからもういいよ」数えて損したやないですか」

「僕が言いたいのはなんでケガしたその日に病院に来ないのかな？つてことなだけど？」

「だって骨折しても固定して寝とけば何日かで治っとるし、ケガもなごみちゃんの飯食って寝とけば酷いん以外は治っとるし」

「じゃあ酷いのは？」

「気合い入れて我慢」

「たまに君が医者にケンカ売ってるんじゃないかと錯覚するんだけど…」

「つつても明日夢先生も僕がこんな身体になった理由知っとるでしょ？」

「だから怒るに怒れないんだけどね」

「まあこれからは月に一回は来ますから許して下さいよ」

「それがいつもの嘘じゃなければね…」

「あはは……」

「そんじゃ今日はもう帰りますわ」

「うん、あんまり無茶しないようにね？」

「無茶なんて生まれてから一回もしたことあらへんよ」

「よく言うよ」

「あ、それと『彼女』に会って行ってあげなよ」

明日夢先生のその言葉に僕は手を降って答えた

「……………」

今、僕はある病室の前で立ち尽くしとった

正確には病室のドアを開けようとしては止めるの繰り返しやった

「……………っ！」

アカン帰りたい、ごつつ帰りたいわあ…

「あれ？坂上君どうしたの？」

声がした方向を見ると持田さんがこちらに歩いてくるところやった

「あ、ここの患者さんの知り合いだったの？」

だったらこんなところに居ないで早く入ろうよ

私もちようど患者さんに用があったんだ」

「……………いや、さっき仕事先から連絡あって会ってる時間なくなつてもうたんですよ…」

「そうなんだ…：やっぱり鬼って大変なんだね」

「まあそれなりですよ
あとすみませんけどコレあの子の部屋に飾っといってもらえませんか？」

そう言って僕は手に持っていたネリネの花束を持田さんに見せた

「うん、それくらいお安いご用だよ」

「ありがとうございます」

じゃあ僕もう行きますわ

……あの子によりしく言うといってください」

「オッケー」

じゃあお仕事頑張ってね!」

「ハイ、行ってきます」

僕は走ってその病室から

逃げ出した

ごめん、ごめんな——ちゃん……

僕、君には会われへんよ……

持田視点

坂上君は親指を立てたチョキのような手を突き出して「行ってきます」と言うと言走り去って行った

「坂上君廊下で走っちゃダメ……っでもういないよ
やっぱり鍛えてるだけあって足速いなー」

ていうか坂上君一回もボケなかったなー
今まで会ったら必ず一回は変なこと言ってたのに
っとそうだ見回りの途中だったわけ
この花も早く飾ってあげたいし

コンコンッ

「大江山さん、入りますよー」

ノックをしてから部屋に入ると必要なもの以外ほとんど置かれていない寂しげな部屋が目に移った

「今日は大江山さんにお見舞いが来てたんだよ
まあお仕事で結局来れなくなったんだけど…」

「……………」

「でもでもその人がお見舞いの花を持ってきてくれたんだよ
だからこれ花瓶に入れて飾っておくね」

「……………」

「綺麗な花だねー」

何て言う花なのかな？」

「……………」

「あとこの花持ってきた人がよろしくって言ってたよ」

「……………」

「だから早く目を覚まして坂上君に元気なところを見せないかね？」
「……………」

私が花を移し終わってベッドに目をやると呼吸器や点滴などを取り付けられた虚ろな瞳の少女が横たわっていた

「だから、頑張ろう？
ね？ 憩ちゃん……………」

怯える心（後書き）

憩ちゃん……出しちゃいましたよ
これからどうなるのか作者にも分かりません！

左遷された鬼（前書き）

勢いで書きました

反省も後悔もまだしていない

左遷された鬼

「まさかホンマに仕事の電話くると思わなかった……………」

僕が病院を出た直後に『たちばな』から電話がかかってきて「仕事のことで話があるから今日中に来れるかな？」と言われて予定しとった七浜観光を取り止め、休日出勤せなアカンようになった

まあこの仕事しとったら休日出勤なんてしょっちゅうなんやけどね主に魔化魍のおかげでな……………うん、今度仕事抜きにしてぶん殴つたろ

しかも休日かて鍛練しとったら半日潰れることもあるし今日みたい

に1日フリーの日って意外と少ないんや
かといって鍛練怠けとったら冬はともかく夏は生きていかれへんかなー

っと、いらんこと考えとる間に着いとるわ

僕はバイクを降りて『たちばな』と書いた看板のある少し古びた店のドアを開けた

「あげぽよー！」

「あ、トウキくんいらっしやい

急に呼び出して悪かったね」

「まあ仕事やからしゃあないですよ」

香須美さんたちは留守なのかたちばなのおっちゃんが一人で切り盛りしていた

てか僕の挨拶スルーですか？

「お茶でも入れてくるから座って待っててよ」

「ああ、おかまいなく」

「まあまあ、せっかく来たんだからさ、ゆっくりしていってよ」
「そしたらお言葉に甘えさしてもらいますね」

たちはなのおっちゃんが店の奥に引っ込んでいったので僕は近くの椅子を引いて座らせてもらうことにした
見たところお客さんは誰もおらへんみたいやな

「今日は香須美さんたちはおらんのですか？」

「平日で結構暇だったからね、香須美も日奈佳も午前中で上がらせたんだよ

多分今頃旦那さんや子供たちというんじゃないかな」

「なるほど」

けどもしお客さんがぎょうさん来たらどうするんですか？」

「そこは心配ないよ」

たった今労働力が増えたから」

「……………まさか僕が呼び出されたんって」

「頑張れ若人！」

「いやいや今日は久々の完全オフの日なんやで？」

七浜めっちゃ行きたかったん取り止めてなんでこんなしみたれた店で働かなアカンねん！」

「ちよつとした冗談のつもりだったんだけどしみたれた店でしょ
ばいおじさんの手伝いでもしてもらおうかな」

たち悪いこと言ったと思ったらなんか拗ねてもたてかしょばいおじさんは言うてへんよ？

「すみませんすみません

ちよい言い過ぎました

せやから拗ねんといってくださいよ、おっちゃん」

「そんな風に謝られるとからかいづらいなあ」

からかわれとっただけいい
分かりますわ！

「それで、店の手伝いちゃんやったら電話で言うてた通りなんか話あるんですね」

「うん、単刀直入に言うとうきくくんには松笠で学校に通ってもらいたいんだ」

へえ、学校かあ

行くなんねんぶりやろ……………

「はあ？！」

どゆことや！！」

「ああ、勿論共学の学校だよ」

「おっしゃあ！！とはなんよ？！」

「え？男子校のほうが良かったの？」

「論点全然ちゃうわ！」

なんで僕が今更学校行かなアカンかつちゅうことや！」

「あ、そっち？」

二十歳の仕事してるやつが上司から「学校通えよ」って言われたらそこ以外どこを突っ込んだらええねん？！」

「まあ落ち着きなって」

やったら最初から突っ込まずな
するとおっちゃん人は人の良さそうな優しい顔を引き締めて懐からコピー用紙を取り出した

「訳を話す前にこれを見てくれるかな」

僕はテーブルの上に置かれたコピー用紙を覗きこんでみる

……どうやら松笠周辺の地図みたいやな

で、その地図には赤い印がいくつも書き込まれている

「この赤い印はなんですか？」

「これはここ一月で魔化魍や童子たちが活動していた場所なんだよ」

「嘘やろ……」

赤い印は全部で十個以上つけられていた、中にはほとんど同じ場所についている印もあった

確かにここ最近松笠周辺の魔化魍退治も何軒かあったけどあそこらへんは全部僕が担当しとるんやと思ってたわ

せやないとこんな短期間に同じ場所に魔化魍たちが活動するやなんて……

「どうも松笠の周辺でだけ魔化魍が異常発生しているみたいなんだよね」

「つまり僕に松笠へ行けって言うたんはこの辺りで発生した魔化魍たちの退治と調査ってことですか？」

「そうなるね」

勿論トウキくん一人に丸投げはしないよ

他の鬼たちにも手伝ってもらおうつもりだけど今回はトウキくんがメインってことになるね」

「僕でええんですか？」

新米の僕よりキョウキ兄さんや師匠たちのほうが……」

「それも考えたんだけどね……」

トドロキくんやキョウキくんが君を推薦したんだよ【あいつなら大丈夫】ってね

それで僕もそれを信じることにしたんだ」

師匠と兄さんが原因かい

無責任に推薦してからに………そう言われたら引き受けるしかないやないか

「ええですよ

その話受けることにします」

「そうかい

じゃあよろしく頼んだよ」

「ただ……」

「ん？なんだい？」

これだけは言うておかなければなるまい

「何で学校に行くか聞いてないんですけど？」

学校行く暇あったらその時間を調査に使ったほうがええやろうに

「え、そっちのほうが楽しいでしょ」

「ドあほかあああ……！！」

「酷いなあ

僕傷ついちゃうよ」

「そんなん行ってる間ああったら調査したほうが何倍もええやろが！！」

「あ」

「あ（。ロ。）、とちやうわあー！！」

「うーん、でももう手続きもしちゃったからなあ
うん、やっぱ行行って」

「なんで僕に話する前に手続き済んでんねん？！」

順番おかしいやろ！」

「面白そうだったから（事態は急を要することだからね
ちよっと強引になっちゃったんだよ）」

「思考と発言逆ううう！！」

てか強引なのは学校行くっていう発想や！」

「元気がいいね

何かいいことでもあったのかい？」

「ないわぁ！

ってかそのネタ知つとんかい？！

使い方百点やないか！」

このおっちゃん最初に会ったときもつとまともな人やったのに
何でこんなはっちゃけた人になってん？

孫できたからか？

「…………もうええです

行きます、ええ行ったりしますよ！」

完全にヤケクソになって宣言した

「そうかい

じゃあ引っ越しも済んでるはずだから今日からここに帰ってね」

そう言って住所が書かれた紙を渡された

「引っ越しも済ませてたんですね……………ハハ、ハア」

もう諦めた

退路どこにもないんやもん……………（泣

「今日は疲れたんでそろそろ帰ります……………」

「そうかい

大丈夫？」

「おかげさんでライフ0です」

そう言って店を出て新しい住居へと帰ることにした

おまけ的なモノ

新居はそこそこ大きいマンションやった

ちょうどウチの引っ越しをしていていた業者の人に一応お礼をしてマンションの階段を登った

引っ越し業者の人にやたらクスクス笑われたんやけどなんかおかしかったやろか？

「五階の二号室は……………ここやな」

真新しい鍵を回してドアを開けて……………僕は膝から崩れ落ちた

なんで、なんで……………なんで僕の秘蔵のコレクションたちが玄関に平積みされとんねえん？！

ふとコレクションの上に乗っていた紙を拾ってよんでみると

【えっちいのは廊下に分別して置いて下さい
キラッ】 たちば（

この日僕はライフがマイナスに突入することがあるという事実を
見した

龍の鳴く学園（前書き）

ついに主人公in龍鳴館！

乙女さんが若干マジ恋のクリスになっちゃった？！
そんな作品ですが良ければどうぞ

龍の鳴く学園

たちばなのおっちゃんに半ば無理矢理に引っ越しさせられて数日、新居にも慣れてきた今日この頃……

朝御飯に栄養バランスフードのソイジャイを二本食べて着替えを始める

「ネクタイってどやって結ぶんや？」

実は今日から学校のほうに行かなアカンから制服を着てるとこなんやけど……ネクタイなんぞ着けたことないからどう巻いたらええんか全くわかれへんわ

いつもは基本的にジャージやラフなカッコばかりやったからなあ

「ん？ってヤバ！

遅刻してまうやないか！」

ネクタイは諦めてポケットに入れて教材や体操着を入れたボストンバックを持ち、そのそばに立て掛けていた烈斬を肩に掛けて急いで表に停めているバイクにかけよる

「雷雲ちゃんおはよー！

今日もツヤツヤボディが可愛すぎやでえ」

我が愛車を一撫でしてフルフェイスのヘルメットを被り、雷雲に跨がる

「てか今更やけどどうやって二十歳の僕を学校にねじ込んだんやろ

か？」

そんな疑問を残してエンジン音と共にその場を離れていった

おー、学校っぽいところが見えてきたわ
ちらほら見かける学生も僕と一緒に制服着てるからここで間違いな
さそうやな

周りを見渡して生徒たちの様子を軽く観察してみる
皆元気そうやなあ

てか何で僕は生徒さんの視線を集めてるんやろ？

……そうか、この視線は僕に向けられてるんやない

僕の可愛い愛車に向けられとんやな

フツ、流石雷雲ちゃんや

こんなに人の視線を浴びとるやなんてホンマ……罪な女やで

「おい！そのバイク止まれ！」

愛車に心を奪われていると、そんな声が聞こえてきた

スピードを落として声のした方向を見ると青い髪の少女が車道に出
て僕の進路上に立ち塞がっていた

ってエエーッ??!!

僕は慌て車体を傾けながらブレーキをかける

キキイーーーーッ！

………ひ、轢いてへんよな？何より雷雲ちゃんにキズついてへんよなあっ?!

良かったあ、ピンピンしとるし雷雲ちゃんも無傷や………つか

「あつぶないやろがあっ！

道路で仁王立ちしとんちやうぞボケエツ！」

僕は確認を終えるなり目の前で僕を睨み付けている少女を怒鳴りつけた

「何をしているはこちらだ！

お前はウチの生徒だろう?!

龍鳴館ではバイクでの通学は禁止されている！」

え、そうなん？

やったら魔化魍出た時どないしよか………

「って問題点そこちやうわっ！

車道に飛び出したら危ないやろって言うтонねん！」

「む、そこは問題ない

止まらなければバイクを切るまでだ」

今、このドぐされオカッパなんて言うた？

僕の雷雲ちゃんを切る？

雷雲ちゃんを切るって………アツハハハハハハハツ、ハア

「あんまりふざけたこと抜かすとシバき殺すぞ、このクソガキが」

温厚な僕を初対面でここまでキレさせるとは………なごみちゃんの初対面のが千倍ましやな

レオ 視点

「うわー、あいつ乙女さんに喧嘩売ってるよ
死んだねあれは」

今喋ったのは俺の幼なじみの中で唯一の……甲殻る「紅一点だろ
おが！」の蟹沢きぬ
いつもハイテンションでバカなことをしている見た目通り子供な奴だ
親しいやつからはカニと呼ばれている

「間違いねえな
よくて全治1ヶ月ってところだな」

今度喋ったのは赤いロン毛を後ろでまとめている目付きの悪い男
こいつは伊達スバル、カニと同じく俺の幼なじみだ
見た目こそ怖いが俺たち幼なじみには非常に面倒見がよく俺たちの
中では兄貴的な存在だ

「にしてもバカなやつだよな」
あの乙女さんにあんなこというなんてさ
てかあいつバイク通学禁止なの知らなかったのかよ」

今喋ったのはクラスメイトの鈴木太郎だ「違うよ?! 皆大好きな鮫
氷さんだよ!」
鮫氷新一といってなんというか……幼なじみだ「嫌

そうに言うなよ！傷つくだろ？！」

皆こいつのことはフカヒレか粗大ゴミ（扱いに困るゴミ）と呼んで「流石にゴミとは姉ちゃん以外には呼ばれてねえよ！フカヒレだけだっ！」

さっきからうるさいなフカヒレのお姉さんにお前が姉モノのエロゲやってるってバラすぞ？

「……………」

想像したらしく真っ白に石化してしまった

こいつのお姉さんはSMクラブの女王様がマゾに見えてしまうほどのドSでフカヒレは小さい頃からスキンシップと言う名の拷問を受けていて今では姉を思い出すだけでトラウマが発動してドリップしてしまうのだ

とりあえず静かになったので紹介を続けるとしよう

「にしてもバカなやつだよな」

あの乙女さんにあんなこというなんてさ

てかあいつバイク通学禁止なの知らなかったのかよ」

今喋ったのはクラスメイトの鈴木太郎だ「違うよ？！皆大好きな鮫氷さんだよ！」

鮫氷新一といってなんというか……………幼なじみだ「嫌そうに言うなよ！傷つくだろ？！」

皆こいつのことはフカヒレか粗大ゴミ（扱いに困るゴミ）と呼んで「流石にゴミとは姉ちゃん以外には呼ばれてねえよ！フカヒレだけだっ！」

さっきからうるさいなフカヒレのお姉さんにお前が姉モノのエロゲやってるってバラすぞ？

「……………」

想像したらしく真っ白に石化してしまった

こいつのお姉さんはSMクラブの女王様がマゾに見えてしまうほどのDSでフカヒレは小さい頃からスキンシップと言う名の拷問を受けていて今では姉を思い出すだけでトラウマが発動してドリップしてしまうのだ

静かになったので紹介を続けるとしよう

俺は対馬レオ、カニの保護者でありスバルの親友でありあそこでバイクに乗っている男を睨み付けている刀を携えた女性、鉄乙女の弟分だ

モットーはテンションに流されず常にニュートラルに生きることだとまあ俺たちの紹介はこれくらいにして、これから乙女さんに肅清されるであろう哀れな子羊の冥福を祈ることにした

清人 視点

「シバキ殺すだど？」

口の聞き方がなっていないようだな？」

「口の聞き方になってないんはどっちゃ

飯にも歳上に向かって偉そうにすなや」

「何をいっている？」

こね学園の生徒なのだから三年の私より歳上のはずがないだろう」

そやった

二十歳っていうんは一応隠しといたほうがええんやろか？

……………ふう、ちよつと頭冷えてきたな

僕もまだまだ精神が未熟やなこんな年下のバイク切るの一言くらい……………ゆるせるかあぁっ！つとクールにクールに

よし、落ち着いたっ

僕はヘルメットを外してバイクを引きながら学校に向かう

「まーええわ

今回だけは水に流したる、僕はもう行くわ
遅刻してまうしな」

「待て！まだ話は終わっていないぞ！」

「僕が許したんやからこれで終わりやろ」

「私が許していない

そもそも私はお前に許されなければならないようなことはしていないぞ？」

うわー本気で言うとするよこのオカッパ……………

もういい、マジで時間ヤバいし無視や無視

「ほう無視するとはいい度胸だな」

瞬間背後で急激に氣が高まったのを感じた

反射的に雷雲に片足を乗せアクセルをひいた

ブォンッ！

「なっ?!」

後ろで風切り音と驚愕の声が聞こえた

いやいや驚きはこっちや……………
なんでただの学生が鬼並の氣を出した上にエンジン音を上回るよう
な蹴り出せんねん……………

「危ないやろ！

いきなりなにすんねん！」

「お前こそ何者だ？」

毎朝校門に立っているがお前のような生徒を私は見たことがないぞ」

「そりゃないやろ

転校生なんやから」

「転校生？ 転校生がくるなど初耳だな」

「鉄よ、その者が言っていることは本当だぞ」

ん？ なんか一人分声が多ないか

「館長？！」

館長？

……ああこのでかいヒゲのおっさん校長的な人か

「龍鳴館の責任者の方ですか？」

今日から転校ってことで龍鳴館に通うことになった坂上清人です」

「うむ

儂がこの龍鳴館の館長、橘平蔵じゃ

お主がここに来たことについては猛士から聞いておる」

「そうなんですか

やったらバイク通学認めてもらえないですか？

やないと仕事場行く時不便なんですよ」

「うゝむ

まあそういう理由なら仕方なからう

特例として許可する

教員たちが使っている駐車場を使うとよい」

「館長！それでは他の生徒に示しが……」

「それは分かっている………しかし鉄よ、坂上の事情は些か特殊でな」

「しかし……」

「まあ館長が言うとりんやからええやんか

それにそこまで規則にこだわっても人生つまらんやろ」

オカッパ娘がまだウダウダ言っているので少しからかってみるとしよか

「貴様っ！」

「おお怖っ、また蹴りが出んうちに僕は職員室に行っとこ」

後ろからやいやいや聞こえるけど無視や無視

さっさと雷雲ちゃんを駐車場に停めて職員室で行こ

ん？ていうか駐車場の場所は？

「失礼しましたー」

職員室で挨拶を済ませて担任の教師と共に教室に向かう

しかし個性的な先生ばかりやったなあ

なんかハチマキとグラサン付けたやたらめんどくさい先生とか挨拶しようとしたら逃げていって職員室の隅から挨拶返してくる今朝のオカッパ娘の声に似てる先生とか………あとあの人生を語ってくる鳥と鍋にブチ込みたくなる亀はなんなんやろ

てかオウムはまだしもあの亀はどうやって喋って浮いとるんやろ？

生物は専門外やけど機会があれば解剖してみよかなー、発明のヒントになるかもしれんし「ソウバァーット！瀬麗武、助けてくれえ！」
「フハハ、飼い主に泣きつくとはシテイボーイは軟弱だな」オウムも良ければいっしょにやったるよ？「イヤァッ！焼き鳥以上に壮絶なバッドエンドが我が輩を待っているう！」残念

それはともかく教室に行くまで暇なのでさっきのメンツに比べるとマトモってか影が薄い担任に話かける

「随分面白……………変な先生が多いんですね」

「言い直して悪化したよ?!」

「おっと失礼

先生の影が薄かったんでつい」

「私のことは関係ないよね?!」

「いうかほつといてよ!」

「どうどう

興奮しないで下さいよ」

「もう……………教師辞めたくなってきたな」

「元氣出してや先生」

「うんありがとう

……………全部君のせいだけだ」

からかい過ぎた

なんかどんよりしたオーラを放ってる……………薄いけど

「まあ、うちはなんでこんなのが教師やってんだろ？みたいなのが溢れ帰ってるわね」

あらどんよりオーラの影響かエライ本音が

「しかもまだ一人とんでもないのがいるしね
今日も遅刻してきてるけど」

「へえまだネタ切れやないんですか
てか先生も掘り下げるとオカシイ部類に入りそうですね」
「……………冗談はやめてよ」

沈黙長かったなあ

そんなキャラ濃くなりたいんかい

「お喋りはおしまいよ

ここが君のクラスになるから覚えておきなさい
じゃあ先に私が入るから呼んだら入ってきてちょうだい」

そう言って薄い先生は教室に入っていた

僕のクラスは3―Aか

…………よし、あれやってみるか

「坂上君入っていいですよ」

呼ばれたみたいやから入ることにする

ガラッ

「失礼します」

すると教室が急に慌ただしくなった
キヤーとかの黄色い声ではなく恐怖や驚愕などの悲鳴に近かったが

「さ、坂上君！

なんで窓から入ってくるのよ?!」

「第一印象が大事なあとに思いました」

「これで第一印象が上がったら人間は進化を間違えてるよ………
ていうかどうやって窓から？ここ四階なんだから…」

「廊下の窓から壁登って屋上に行ってそこからまた壁伝って降りて
きました」

「………何だろう

胃が痛い気がする」

お大事に

とりあえず挨拶しましょか

「先生から話聞いと思うけど転校生？むしろ転勤生の坂上清人
です

僕はこの学校の全員と友達になりたいとは思ったらんけどよろしゅ
う頼むな」

クラスの全員を見回すと全員ポカーンと口を開けている

いや一人なんか熱烈な視線送ってくるやつがおるな

青いオカッパの………なんか見たことある子や

ふむ口パクでなんか言うとするな【あなたと…合体したい】「違う！
後で話を聞かせてもらおうと言ったんだ！」らしいです

しかしこの子がクラスメイトかいな………

予想以上に今回の仕事は大変なことになりそうやな

狩人あらわる

拝啓 師匠殿

夏も終わりに近づき日も早くなってきた今日この頃、師匠はいかがお過ごしでしょうか？

僕は今日から龍鳴館という学校に通うことになったのですが結構楽しくやっています

担任の先生は影こそ薄いですが突っ込みにキレがある意外と面白い人ですよくいじらせてもらっています

クラスではちよくちよく質問されたりするのですが答える度に聞いていた人たちはポカーンと口を開けてフリーズしてしまいますが何故なのでしょう？

あとクラスメイトにやたらと僕に突っかかってくるオカッパ娘がいるのですがこれは求愛行動と受け取ってよいのでしょうか？

そして今は見覚えのある二人に押さえつけられ食事を目の前にした童子や姫のような目で舐め回すように見られています

そしてその光景をこれまた見覚えのある女の子が汚物を見るような目で蔑まれています

何でこんなことになったのかは分かりません

ただ1つだけ、僕にも分かることがあります

このシチュエーション………なんかムラムラします

このメールを見た彼の師匠は「俺……弟子の育てかた間違えちゃったんスカね、斬鬼さん？」と涙を堪えながら呟いたらしい

とりあえず状況の分からん読者さんと僕のために回想スタート

自己紹介のあとはオカッパ娘が突っかかって来たんをからかいながらいなしたり、クラスメイトの質問に答えてキョトンとさせたりと、まあ色々あった

ちなみにキョトンとされた質問と答えは

「転校した理由は？」 「上司に無理矢理……」

「関西弁って珍しい二、近畿から来たのか二？」 「そっちのが珍しいと思うよ……まあ出身は京都やな、家出しとるけど」

「ギターやるんだな、ちょっと触ってもいいか？」 「まだまだ下手なんやけどな、あとそれ今は弦付けてへんし下手に触ると指切り落とすからやめといたほうがええよ」

「何でCDを剥き出しで腰につけてるの？」 「いやこれCDやなくて……ペット？」

それで昼休みになったんで購買に向かってるんやけど……

「んー？何処にあるんやろ？」

見つからんなあ

クラスの子に聞いたいたら良かったかもしれんてか校舎の外に出てみたけど購買っ外にあるもんなんか？
学校の仕組みなんぞ忘れてもうたわ

「ないな」

「……………ん？　なんやあれ？」

校舎外に出て少し歩いた所に木造の建物を発見した
あれは流石に購買ちゃうよな？

いやでも今んとこ購買っぽいところなかったしなあ
……………まあ見るだけ見とこか

「お邪魔しまーす
ここって購買ですか？」

って誰もおれへんやん

僕は建物の中に入って辺りを見回してみる

本棚には書類やルーズリーフなどのお堅い品から漫画みたいな学校
にあっという間か疑わしい物まであってジャンルが不明すぎる
棚の上にはゲーム機、ゲームソフト、枕、毛布、菓子などがある
……………休憩所か？

そして机の上を見るとノートパソコンと可愛い弁当箱が一つ

「弁当箱があるっちゅうことはやっぱ誰かおるんか？
それにこの匂い……………なごみちゃんの料理？」

基本食事に興味ない僕でも分かる匂いは日菜佳さんとあきら姉あとは
はなごみちゃんの料理くらいやからな
けど何でこんなとこにあんねん？「だれですか？」

弁当箱を首を傾げながら見ていると部屋の奥から人が出てきた
てかなごみちゃんやないか

「精人さん？　何でこんなとこにいるんですか？」

「ちゃうわ！発音は合ってるけど字が致命的にちゃう！」

「ていうか何で制服着てるんですか？」

マゾで露出狂なのは知ってましたけどコスプレにも手をつけてたなんて……けど露出狂とコスプレってなんか矛盾してないですか？」

「コスプレっちゃんコスプレやけど趣味ちゃうから！」

「……………あつ、マゾと露出狂でもないわ！」

「……………」

「その分かってる分かってるみたいな顔やめや！」

「ちよつと5？以内に近寄らないでもらえますか？」

「かなりリアルな数字言うんやめて！」

ホンマに嫌われたみたいで泣きそうになるから」

「そんなのはどうでもいいんです

何で清人さんがこんなところでコスプレしてるんですか？」

「色々ツッコみたいけど無限ループになりそうやからもうええわ……

……

なごみちゃんやから言うけど僕がここにおるんは猛士のお仕事や」

ホンマは一般人に情報洩らしたらアカンのやけどなごみちゃんってほとんど僕のサポーターみたいなもんやからたちばなのおっちゃんも許してくれるやろ

「最近松笠近辺でやたら魔化魍が出没しとってな

その調査でこっちに來たんや

学校に通ってるんは………たちばなのおっちゃんの悪ふざけってとこや」

「ああ、あの人ならやりそうですね

それよりそれって結構まずいんですか？」

「現状なんとも言えんなあ

けど調べんでなんか起きたらそれこそまずいっしょ」

「それもそうですね」

けど何か起きる気はするんやけどな

こんな短期間に何回も魔化魍が出とるやなんて師匠が言うてたオロチの前兆以来やからな

もしそんな大事になるんやったら烈斬を完璧に使えるようにならな冗談抜きで死んでまうな

それに今は僕だけの問題やない、強くならなとなごみちゃんまで危険に晒してまう

なごみちゃんやのどかさんたちのためにもそれだけは絶対に阻止せなアカン

僕がそんな風にシリアスに決意を固めていると

「どうしたんですか？」

そんな不景気そうな顔して……左遷されて給料でも減ったんですか？」

「さ、さささ左遷違うわ！………多分」

なんか早速決意が揺らぎそうや………とりあえず後でおっちゃんに給料のことは聞いとこ

「てかなごみちゃんの通うてる学校ってここやったんか」

「知らなかったんですか？」

「うん興味なかったし」

（なんだろう、この敗北感）

なんでかなごみちゃんが微妙な顔で黙りこんでしまった
どしたんやろ？

グウ

そうやった、昼飯買うために購買探しとるんやったわ

「なごみちゃん、ここって購買ちゃうよね？」

「違いますよ」

ここは竜宮って呼ばれてる生徒会室です」

「生徒会？」

なんか思ってたのと全然ちゃうな

……あれは生徒会の備品か何かなん？」

僕は面食らいながら棚の上に乱雑に置かれたゲームや菓子を指差す

「あれはうちのお姫様やダメ人間たちプラス甲殻類が持ってきたものです」

「姫、ダメ人間……甲殻類？」

色々ツツコミたいけどとりあえず一つだけ、ここザリガニでも飼うてんの？」

「あれと比べればザリガニのほうが千倍可愛いですよ」

あれ？なごみちゃんがキレとる？なんで？

「ま、まあええわ

ここにおるってことはなごみちゃんも生徒会なんか？

随分イメージとちゃうなあ」

「……………この生徒会長にちょっとハメられました」

「さ、さいですか」

恐っ！なごみちゃんこわっ！

なんか軽くうつむいて「ククク」とか笑っとるんやけど……何があったか気になるけどよう聞かんわ

とりあえずここは話題を逸らさな

「あのーなごみさん、購買がどこにあるかご存知ありませんか？」

「クク、ん？」

ああ購買ですか？体育館の横にありますよ

けど今から行っても録なモノ残ってないとおもいますよ」

「ソイジャイあったらええよ

最悪水とコッペパンでも腹は膨れるし」

「清人さん、まだあんなジャンクフード食べてるんですか？」

「ジャンクフードで……：一応アレ栄養食品なんやけど

それに結構ええ匂いするし」

「でもあれってフルーツの味ばかりで偏りありますよ」

「フッフッフ、知らんのか、なごみちゃん

最近はお好み焼き味や納豆味なんかもあるんやで」

「なんか余計にジャンクフードっぽく思えてきたんですけど……

ていうか清人さんこの前私が料理作ってから何かちゃんとしたもの
食べたんですか？」

「たちばなで草餅食べたで！」

「それは料理じゃありません」

「ならあとはソイジャイしか食べてへんなー」

「はあ……よくそれであんな奴らと闘えますよね」

「僕ってかなり燃費がええからな」

師匠たちにも、もっとちゃんとしたもん食え言われるけど自分で作
ったら台所が三日経たずに崩壊しそうやし、かといって店で食って
も金もつたいないしなあ

「まあしゃあないやん

僕ってほら、味覚ないやろ？」

基本食事は食感と匂い重視やからさ」

僕は昔、ある出来事に巻き込まれた時に五感の一つである味覚を失ってもうた

おかげで食事を取っても味が全く分からんから、慣れるまでは非常に気持ち悪かった

ついでにぶっちゃけると僕の人外染みた怪力や回復力、若干の丈夫さなどもその時に手に入れた、一応全力出したら一発で魔化魍黙らせるで？…間違いなく腕がスクラップになるけどな！

病院で見てもらっても原因は分からず、放置は危険やから猛士の管理下に……そっから色々あって現在の状況に至るわけや

「……………それでも食事はきちんと取ったほうがいいですよ
それだけじゃ体に良くないですし」

「まあ確かにな…
引っ越して近くなったことやし明日にでも【あまみや】に行つてなんか作ってもらおかな」

「……………いいんじゃないですか」

何故に僕は睨まれてるんですか、なごみちゃん？

「け、けどなごみちゃんのご飯も捨てがたいなあ
両方とも美味しい気がするし」

不思議なことにあきら姉となごみちゃんの料理は具体的な味までは分からんけど美味しく感じるんよな
なので最低でも週に一回はどちらかにご飯を作ってもらっている
あきら姉の店に顔出した時となごみちゃんがサポーターとして仕事について来てくれる時がほとんどやから読者さんが想像しとるような色っぽい展開なんて…ナツカタヨ？

「……だったらこれ食べますか？」

なごみちゃんは机の上に置いてあった弁当箱を指差して言った
なるほどな、それなごみちゃんの弁当やったんか

「ってええの？」

それってなごみちゃんの昼御飯やろ？」

「そうですけど、今から購買に行ってもろくな物ないと思いますよ
？」

「別にソイジャイあったらええよ

最悪コッペパン水で流し込むし」

「ソイジャイはともかくコッペパンをその方法で食べるのは止めて
ください！」

「ええ！？なんで怒んの？」

「コッペパンなんてただでさえ味気ないものを牛乳ならまだしも水
でなんて……吐き気が」

そこまで！？

なんかごめんなさい！

「なんか一気に食欲失せちゃったんでやっぱりこれ食べてください」

そう言ってなごみちゃんは弁当を僕に差し出した

「ホンマにええの？」

再び確認をとると、

「いいからさっさと食べって言ってんだろ？」

物凄いドスの効いた声で睨まれた
けどなんか心地ええなあ

「ありがとうございます！」

「…………どっちの意味なんだか」

礼を言うたらエライ呆れた顔された

まあええわ、早速なごみちゃんの弁当食わせてもらおか

「ごちそうさん

やっぱなごみちゃんの料理は凄いな

僕でも美味しい感じるんやから将来絶対ええ料理人になれるで！」

「あ、ありがとうございます…」

なごみちゃんの弁当を食べ終わり感想を言うたらちよつと顔赤くして照れてもうた

やっぱ料理関係は真剣にやっとなるから褒められたら嬉しいんやろな

「なごみちゃん、お弁当ありがとうございます」

「いえ、鬼の体調管理もサポーターの大事な仕事だって日菜佳さんも言っていましたから」

「なるほど流石鬼の嫁やな

じゃあ僕教室に戻るわ」

僕は席を立ち上がり出入口のドアに手を掛けようとするどドアが独

りで開いた

……自動ドア？

「九月だつてのにまだまだ暑いわね」

よっぴーもつと仰いで」

「うう、さっきからやってるじゃない、それにもう竜宮に着いたんだからクーラーでいいじゃない……ん？」

「どしたの、よっぴー？……あ」

「………久しぶりやね、エリカちゃんと良美ちゃん」

自動ドアなんかやなく目の前の金髪ハーフとエビっぽい髪型の女の子達が外から開けただけらしい
とりあえず挨拶はしたから……窓に向かってダッシュ！

「ハッ、よっぴー外から回りこんで！」

「OKエリー！」

金髪ハーフ：霧夜エリカちゃんは素早くエビっぽい髪型の女の子：佐藤良美ちゃんに指示出して窓に向かう僕を追ってきた

エリカちゃんは狭い室内でとんでもないスピードをだして僕との距離を縮めてくる

このままエリカちゃんから逃げ切れそうやけど窓の外には良美ちゃんおるから捕まってまうな……せやったら！

僕は走るスピードを遅くし窓の手前で素早くUターンし窓の下にある壁を軽く蹴って加速をつける

「捕まえ、きやあつ！」

エリカちゃんは僕がいきなり後ろを向いたことにビックリして体勢を崩してしまった

その隙についてエリカちゃんの脇を通りドアまで走り出す
フツ、どうやら今回は僕の勝ちみたいやな
勝利を確信し外に出ると

「えいつ」

「え？グファッ！？」

可愛い掛け声とともに腹にとんでもない衝撃を受けて押し倒された
痛みをなんとか耐えて腹の上を見ると良美ちゃんのエビ：ちゃう頭
が乗っかっていた

って良美ちゃんが何故ここに！？

窓の方に回り込んだはずやないんか？

「作戦通りね、ナイスよっぴー♪」

「えへへ上手くいったね、エリー♪」

ハ、ハメられたああ！

さては良美ちゃんずっとドアの前で待ち伏せしとったな！？

ってエリカちゃんがよろけたんも演技？上手すぎやろ…

「大正解よトウキ」

地の文を読まないで

「フフ♪正解者にはご褒美あげないとねえ」

「そうだねエリー」

エリカちゃんは僕に覆い被さり顔を近付けてくる

「エリカちゃん顔近い、近いって！」

って良美ちゃん！？何でワイシャツのボタン外しとるの？いやいや
流石にベルトはダメやって、え？もう限界？ねえ何が？何が限や

ねん!?!」

ヤバイって、今回は貞操守り切れないかも
そうや! なごみちゃんがおるやないか! ?
なごみちゃんなら今の状況を打破してくれるはず…

「なごみちゃん助けて!」

「あん?」

……………絶対零度の瞳で蔑まれとるうう! ?

アカン…そんな目で見られたら興奮、やない絶望してまう…

「あ、なんかおっきくなつたよトウキさん」

……………な、何がだろうネー? わかんないネー?

とりあえず回想はこんなもんかな
うん……………何でこんな状況になったんかさっぱり分からんな

狩人あらわる（後書き）

続きは全く考えてない、反省も後悔もドツプリしている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7256t/>

仮面ライダー闘鬼一つよきな娘と未熟な鬼一

2011年11月14日06時26分発行